

【1】 建物 外観

カメラ：NIKON D850

レンズ：AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8E ED VR

ライト：ハンドストロボ

- ・できる限り全体が把握できるような写真を撮影する。
- ・外観が引き立って見える季節をメインとする。
- ・陽の当たる向き、時間帯を調べたうえ、撮影する。
- ・外観のメインを決める。
- ・建物とレンズの歪みをできる限りなくすように撮影するため「垂直」を出す。
- ・垂直を出すには、本来は「アオリカメラ」「シフトレンズ」を使用して撮影するが、画像処理、補正でも可能である。

※ 上の写真は、中庭から正面の建物入り口を撮影したものであるが、ストロボを発光させることで、入口の窓ガラスを光らせ、暗いところもディテール(細部)が出ている。



【2】 庭園展示物 （瓦）

自然光(太陽光)でも十分だが、細部まで表現したい場合は、日中でもハンドストロボを利用するとはっきり見えてくる。特に逆光の場合は有効である。



【3】 看板 <金箔反射する撮影>

◆ 自然光

【写真左】 露出明るめで撮影。

露光時間を長くすることにより全体は明るくなるが、周りの色被り（色温度による）が出る。そのため看板の上の文字がはっきりしていない。

【写真右】 カメラを通常のオートのまま撮影。

明るいところに露出が合い、全体に暗い感じになる。



◆ ハンドストロボ

【写真左】 ハンドストロボを上向きにし、バウンス（跳ね返り）した柔らかい光を全体にまわすように撮影。

看板の文字は見えるが、周りの状況が暗くなる。

【写真右】 ハンドストロボを少々正面に向け、バウンスの量を減らし撮影。

金属部分に光の強弱が付き、金属のディテール（細部）がでる。

※全体にくっきり見えるが、影が強く看板が光りすぎて質感がわかりにくい。



◆ アンブレラ

アンブレラを使った撮影は、ハンドストロボを用いた撮影より光が全体によく拡散して周り、奥まで光がとどく。

【写真左】左右均等の光で撮影。

全体に光が周り、周囲の状況も把握できる。

【写真右】左のライトを少し中心寄りに移動し撮影。

看板の質感(金属感)が表現できるとともに立体感も若干出すことができた。



【4】 煙草入

◆ アンブレラ

『ライト1灯<左>』 立体物撮影の基本のライティング

看板の文字に立体感があるため、左からのメインライトで文字が立体的に見える位置を探しライティングを行う。右側が壁であったため、メインのライトの光は、壁に反射するバウンス(跳ね返り)効果も見ながらセッティングする。



『ライト2灯<左右>』

左右の光量のバランスを変えることで、文字が立体的に見えるようになる。



『ライト2灯<正面>』

文字のところに光の反射が写り込んでしまっている。



【5】 屏風

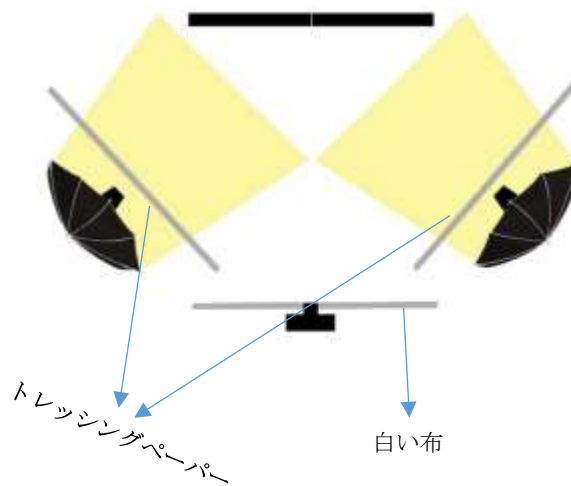
◆アンブレラ+デュフューズ(トレッシングペーパー)

デュフューズ撮影とは：ストロボと被写体との間に透過性のある布等の素材を挟むことで、光を直接当てずに拡散させることで被写体をきれいに撮る方法。

『屏風を 180 度開いた状態で撮影』

屏風とカメラは平行を保つ。ライト 2 灯を少し遠くから照らし、なるべく柔らかいライティングで光を回し均一性を保つ。

※ 屏風は金箔を含んでいたのので、白い布をカメラの前に張り、明るく写るようにする。



▲ アンブレラ+デュフューズ

『屏風を〔くの字型〕に閉じた状態で撮影』

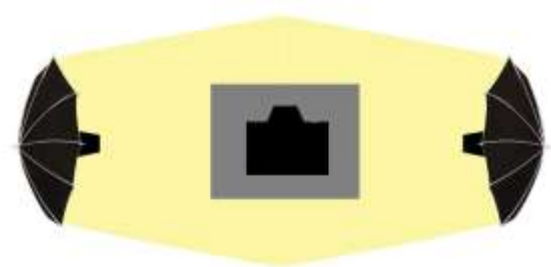
屏風をくの字型にすることで、屏風の左右の幅が狭くなるため、屏風を 180 度開いた状態のときとくらべ反射が変わるので、それを回避するため左右のライトの幅を狭める。



【6】 俯瞰撮影 <上から見るもの、並べて撮影するもの>

被写体に厚みがある物の場合の俯瞰撮影では、影が出やすくなる。できる限り、影を目立たないように撮影するには、左右のライトのバランスや光の硬さを変えることで影を目立たなくできる。

今回の場合、左右均一のライティングだと、糸の影が左右均一にでるため、糸が影と混ざり、太くボケた感じになる。それを少なくするために、左のライトをメインにし、右のライトを弱くすることにより、左側の光の影が糸の右に強く出て、立体的に見える。また、ボケた感じもなくなりはっきり見えてくる。



【7】 立体物 <陶器 壺>

- **アングル**： 『花瓶・壺』などのいわゆる立ちものの陶器は、基本的に正面から撮影。奥行きがわかるように少し口元がわかる角度で撮影する。
- **ライティング**： 形状を出すために左右、もしくはトップからライトを入れる。今回は天井の高さ等の問題があり、左右にライティングし、作品の横ラインと丸み感を均一に出すようにした。左右の光量のバランスを変え、立体感を維持した。
- ☆ 記録性を重視するなら、裏面の記録がわかる部分も撮影しておく。

真正面から撮影



少し上から撮影



裏面





【8】立体物 <冷蔵庫>

冷蔵庫は木製であり直方体である。したがって、側面の3面『縦、横、奥行き』がわかるアングルであり、なおかつ機能がわかるよう撮影する。

○真正面からの撮影 【写真左】

正面からの撮影の場合、真正面だと扉だけの記録となる。正面のカットのみでは正面のどこなのかが伝わりにくい。

○少し上から撮影 【写真右】

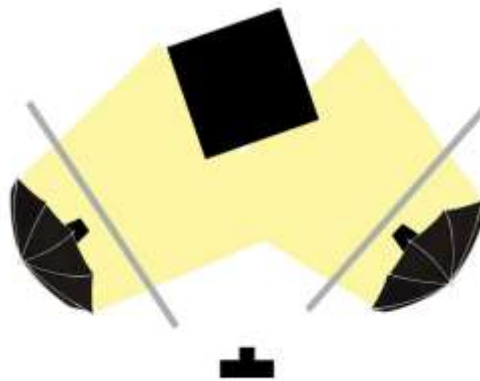
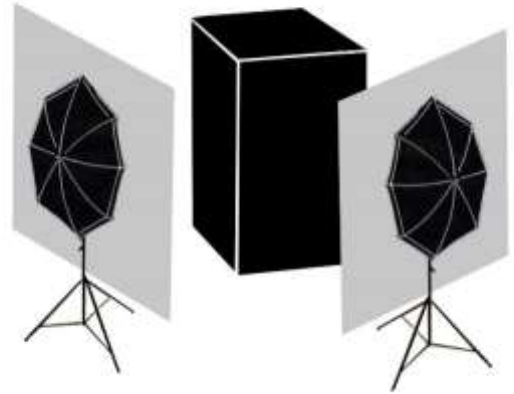
天面を入れることにより、『形状（立体物のイメージ）』が伝わる。

○3面がわかるアングル【写真下】

通常は左振りの場合が多いがこの場合扉の位置により右振りで撮影。

冷蔵庫の機能を比較するのに適している。





【9】布地 <着物>

着物の場合は、『生地・柄』を見せるために衣桁にかけて撮影する機会が多い。洋服の場合は、広告撮影ではトルソー（ボディー）に着させて撮影する。できる限り『形状』がわかるセットと向きにする。

○ライティング：『質感・ディテール』がわかるようなライティング

基本の複写に近い『2 灯』だが、立体感を出すために『左右のバランス・光の強さ・光の硬さ・ライトの高さ』を変える。

全体の形状がわかるように少し左振りに撮影

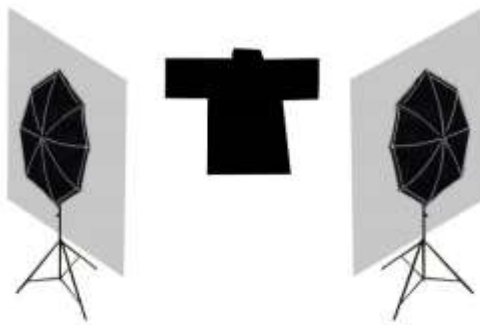


正面から撮影



袖を広げ全体をしっかりと見えるように撮影。





【10】 複写物 <額アクリル入り絵画>

絵画、書などは展示、保管のために額に入っている場合が多い。特にアクリル入りのものは通常の複写撮影の方法では難しい。

アクリル入りの撮影は、ガラスの反射を消すために暗幕を前面に映り込ませる。

暗幕なし自然光

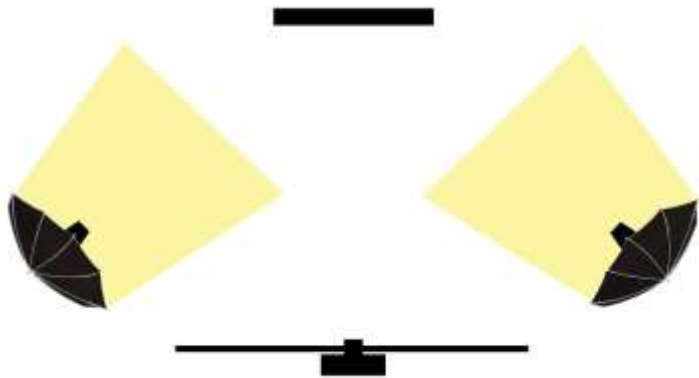


暗幕あり自然光



暗幕ありライティング





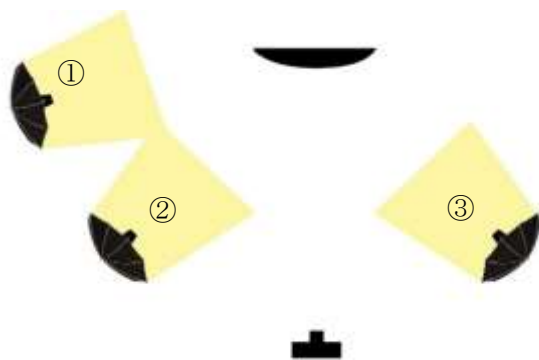
【11】 丸い膨らみのある看板

◆ アンブレラ 3灯

丸い膨らみがあり、さらに金箔を施したものは、平面もののライティングプラス立体的に見せるライティングを取り入れる。

1灯を看板の横位置近くにセット〈図①〉、看板の左端を光るように持っていく。そして看板の丸みに合わせ滑らかに明るさが繋がるように、平面のライティングの左の位置〈図②〉に近い状態にセット。右のライト〈図③〉も平面のライティングのようにセットする。

ライトの強さは、左端を一番強くし、右ライトを弱くして明るさの濃淡で膨らみ感を出すように持っていく。



『左右のライトのバランスを変える』 左からのライトを強めにし、明暗で立体感を引き立てる



『左からのライトを硬い光にする』

左からのライトをアンブレラではなくダイレクトに硬い光を。バックの質感にも影響が出てくる。



【12】彫り物の立体感の凹凸撮影

彫り物（凹みのあるもの）は、ライトの左右のバランスで凹み部分に影をつけ立体感を出す。

凸凹の複雑な場合には、ライト3灯を用い、凹んだところに強い光を入れ、左右の光を弱くすることで、目の錯覚を起こすライティングをする。資料写真的にはNGであるが、立体感の表現する場合に有効である。

立体感 凹み



立体感 凸み

